

社会学部創立40周年記念連続講演会(2000年6月9日)

大学の知と社会の知

パネリスト 大澤真幸¹⁾
 鷲田小彌太²⁾
 田畑光永³⁾
 横田恵子⁴⁾
司 会 大村英昭⁵⁾

大村 それでは、シンポジウムの部に入らせていただきます。司会は、この4月より本学に常勤講師として赴任いたしました大村英昭でございます。

最近、日本社会学会などにおきましても、臨床社会学という言い方で、本日のテーマにもなっております「大学の知と社会の知」というものが取り上げられております。私なりの言い方をすれば“人生の生きる知恵”みたいなものが、社会学の中からどうやって導き出されるのかということについて、臨床社会学の立場から考えてみたいと思います。本日の企画自体は私の着任前に計画されていたのですが、高坂先生から司会についてのお話をいただき、喜んでお引き受けいたしましたような次第でございます。

まずパネリストの皆様をご紹介申し上げます。一番左がさきほど基調講演をなさった大澤真幸先生、その次が鷲田小彌太先生、そして次の方は、お顔をご覧になって「どこかで見たことのあるお顔や」と思われた方はちょっと古い方ですね。テレビで活躍しておられたのは12～13年前になるそうですから、今の若い世代の方はテレビの中の田畑さんはご存知ないかもしれませんね。本日のパネリストの中では一番年長でいらっしゃる田畑光永先生です。そのお隣が横田恵子先生で、大澤先生とほぼ同世代かと思えます。

鷲田先生は哲学がご専門で、領域とすれば「哲

学の知」、その中でも臨床哲学、臨床倫理学を提唱されております。横田先生はソーシャル・ワーカーあるいは臨床心理士として現場の実績を積んでおられる方です。田畑先生のご専門は現代中国論でございますが、マスメディアの世界から大学という世界に入られましたので、本日は大学に入られての感想などを含めつつ、両方の世界からどのようにお考えになっておられるかをお聞かせ願いたいと思います。

あとはご自由にパネルディスカッションを進めていただくわけですが、まずはさきほどの大澤さんのお話を聞かせていただいた感想から申し上げます。私もこれまで先生のご本を2～3冊読ませていただきましたが、いわば理論家として、社会がどのようにして成り立つのかといった最も根本的な問題を研究されてこられた方です。非常に難しいお話が多いので、さっと読んで頭に入ってくるというわけにはいかないのですが、にもかかわらず、大変お話が上手な方であると思いました。起承転結をきちんとつけながら、馴染みのある例を織り混ぜて、大変明解な議論をしてくださったと思います。ですから、あえて注釈をつけることはいたしません、最初に少しだけ確認させていただきたい点がございます。

一つは、ジャック・ラカンの『4つのディスクール(言説)』という話から入って、「大学の知」は本来こういう方向にあったし、あるべきだ

- 1) 京都大学大学院人間・環境学研究科助教授
- 2) 札幌大学経済学部教授
- 3) 神奈川大学経営学部教授
- 4) 大阪府立大学社会福祉学部専任講師
- 5) 関西学院大学社会学部教授

というジャック・ラカンの説をご紹介いただいたわけですが、現在はすでにラカンが説いた意味での「大学の知」が成り立たなくなったという風に大澤さんご自身はご判断なさっておられるわけでしょうか。

大澤 そうですね。

大村 その場合に、なぜ成り立たなくなったのかということ、つまりあの図式でいうと基本的には“S1”という“場”としてかつては保証されていたのに、大学がどういう条件を失ったためにそれが成り立たなくなったのか、いわば「オタクの知」と同様のものにならざるを得なくなったと大澤先生はご判断なさったのでしょうか。何がそれを保証しているかについて、ラカン自身は何か述べているのでしょうか。それとも、そういう具体的、経験的な場の現実については触れていないのでしょうか。

私としては、「大学の知」が持つ力の内容みたいなものを原理的に説明していると考えた方がいいのではないかなと思ったわけですが、大澤先生ご自身は、何がそういう条件を失わせていったのかについてどのように考えておられるかというあたりから、お話を始めていただきたいと思います。

大澤 ひと言、ふた言で答えられる問題ではないのですが、ひとつは、大学が悪いわけではなくて、むしろ社会全体の変化がこういう結果を生んだわけです。たとえば、ホームズが答えを出すことができるのは、ホームズが賢いからだと言者は思いたくなるわけですが、そうではなくて、みんながホームズを信頼しているから、彼は答えを出すことができるわけです。つまり、小説上はホームズが真理を言い当てたという風になっていますが、客観的に考えてみますと、社会学の言葉でいう“予言の自己成就”的なところがあるんです。

たとえば、先ほど精神分析とホームズとは同時代的な現象であると申し上げましたが、精神分析医がなぜ分析をすることができるかという点、精神分析医に能力があるからではなくて、その能力を患者が信頼しているからできるわけなんです。本当は、精神分析医は何も考えていないのかもしれませんが、むしろ自分を空っぽにしているわけですから、何も考えていないほうが多いのです。た

だ、患者がそれを信頼するから、そこに真理が現れるわけですね。

大学もこれと同じで、「大学の知」が失われてくる理由は、大学がしっかりしていなかったというわけではなくて、おそらく社会の中で知識などがどういう形で編成されてくるかといった、仕組み全体が変わってしまったことに原因があるわけです。これはものすごく大きな社会的なテーマだと思うのですが、なかなか答えは出ない問題です。

ただ、イメージだけを申し上げておきますと、先ほど『バベルの図書館』という寓話をご紹介しましたが、言ってみれば知識の在り方が『バベルの図書館』をめざしているんです。これはひとつのアイロニカルな結果だと思うのですが、「大学の知」が真理から遠ざかっていったためになっただけではなくて、真理への飽くなき闘争というものが造り出した情報宇宙みたいなものがあまりにも管理されていることが、結果的に真理へのアクセスの可能性を奪っていったと言えると思います。

究極的には人間は有限なものなんです、その有限な人間がそれを乗り越えようとして無限の知識に近づこうとするアイロニカルな結果が、知識の中に真理を見出すことをより一層難しくしてしまっただけということだと思います。

ですから私たちは、そういうことを受けた上で新しく「大学の知」を考えなければならないわけで、ラカンが描いたような古典的なタイプの「大学の知」を回復しようとしても、道化的な失敗に終わると思います。

大村 大澤先生は最後に「オタクの知」についてお話されましたが、大学人にとっては特定の主題自体がユニバーサルで包括的な知識であり、それが原理的バリューを持ちえないという中であっても、彼らは平然とそれを無限に追いつけることで満足してしまうということがあると思います。これは鷺田先生にお尋ねしたいのですが、そもそも大学の教師なんていうのはどこかで「専門馬鹿」と呼ばれております。しかし私の理解では、ある専門をきちんと固めていくと、その先には「オタクの知」にならずに、自然に先ほどのことばで言えばパーフォーマティヴな含意（インプリケーション）を持つてくると思うんです。ですから、

それが無いということは、専門性をどこかでごまかしてしまったからだと思うのです。私は70年安保の時代に、学生から「専門馬鹿」という言葉が出た時に、しばしばこう答えた覚えがありますが、そういう意味で考えると鷺田先生は、大澤さんの問題提起に対してどのようにお考えでしょうか。むしろ、気持ちの上で“反対”という思いもおありになるかと思うのですが。

鷺田 いえ、大澤さんの意見に対して反対はございませんが、ただ、育った歴史が違うんですね。デビューしたのは同じ頃だったと思いますが、社会学をやった人は幸運だなと思うんです。僕は哲学の失格者ですが、ギリシャ哲学でもドイツ古典哲学でも、特定のテーマをやるのに大体30年ぐらいかかるんです。ハイデggerをやっていた東大の渡辺二郎先生という方がおられますが、肝臓や肺癌を患って胃を悪くして、翻訳もあるし、本は書かれていますけど解説書しか書いていませんので、本格的な書物はこれからやらなくてはならない。もし、世界レベルのディスクールにしようと思ったらそこまでいかなければならないわけです。

だから僕みたいないい加減な人間は、「大体、先生方がやってる学問はなっとらんじゃないか」と思う。どんなに偉い先生でも、書いた論文を読んだら笑っちゃいます。先生は偉いんだけど、先生の書いた論文は、無茶苦茶レベルが低いんです。そして数も少ない。私自身はただ闇雲に駄文を書いていますけど、僕の先生なんかは一冊の本も書かないで退職されています。しかし、ものすごくよくできるんです。それくらい時間がかかるものなんですね。

そういう先生と、1960年末ぐらいの“学問の危機”であるとか、“大学の知の危機”の問題について議論していると、危機だということは認めてくれるんです。しかし、じゃあどうするかということについて、最後に握手して別れる時には、それぞれの人間が自分の「知」を最大限に発掘して、新しい物語を書かなくてはならない。もはや、ヘーゲルとかプラトンとか、ハイデggerとかの大きな物語に意見して生きるという時代ではなく、自分自身で一つの物語に作っていかねばならない、と先生は述べていました。しかし、

そういう先生方ですら、一つの仕事もなしていません。むしろ、できなかったというのが現実です。それくらい「知」の集積部分というのはたいして大きくはないけれども、重たいんです。ヘーゲルを乗り越えるとか、マルクスを乗り越えるとかと簡単に言いますが、本当に新しい学問を築くにはどうしたらいいのか、ということについては処方箋が持てないんです。

加藤尚武さんという、僕らのなかで一番期待していた先輩がおられましたが、結局彼は「現代科学技術の進展の中で起ってきた問題を解く鍵は19世紀にあるんだ。そこに戻るしかないんだ」と言うんです。僕は、会ったらぶんなぐってやろうかと思うぐらいあけすけに言うわけですが、確かに19世紀のカントやヘーゲルに戻って現代の生命倫理学を語ろうとすると、非常にうまくいくんです。

私たちは1970年以降の30年間を、歴史が与えてくれた完全な毒ではないけれども、かなり使える技術というのをないがしろにしてきたんです。大学に権威がないということは、我々が権威をもつなんてことは間違いだということなんです。大学に権威がないならば、自分が権威をもたなければならぬ、つまり内的権威ですね。では、それを発揮するにはどうしたらいいのか、ということはずっとやってきたわけですが、結局は僕の先輩を含めた優秀な人たちは物語を書かなかったし、発言しなかつたし、いい成果を上げているひとは、古典的な哲学、学問体系に戻っているわけです。学問体系を認めているわけではなく、道具として使っているのです。実際は機械ですから部品は使えるわけですが、そうすると、大澤さんが言われた大学の権威を回復することが問題なんじゃなくて、大学が内的権威を持つにはどうしたらよいかというプロセスというか、アプローチをしていかなければならないと思います。

僕は、大澤さんの本を読むと、大澤さんの権威があったら困るな（笑い）と思ったり、宮台さんになつたらちょっと困るしな、なんて思うんです。それはどうしてかということ、学問の世界というのは残念ながらというか、すごいというか、すごい遊びがあって、田中美知太郎先生は「プラトンさえやれば現代の問題はほとんど解決できるんだ」

と述べておられます。もちろん僕はそんなことを信用していませんけれども、しかし参照すれば、かなり私たちが悩んでいる問題が解決できるのは事実です。

ラカンの図式は別にたいしたことはないんだけど、大澤さんが解説すると力を持ってくる。シャーロック・ホームズに関しては僕も同じように理解していましたので、大澤さんのお話をとても面白く聞かせていただいたのですが、「大学の知」や「社会の知」との接点はどこなのかがよくわからないんです。意見としてはその通りだと思いますが、全体的な、包括的な「バベルの知」を再構成することは誰にもできないけれども、今、現に我々に与えられた知的財産を使ってどういうものを作っていくのかということ、片手間ではなく、両手間でやらなければ、信頼を回復することはできないのではないかと思います。僕自身の責任なんかはたいしたことはありませんが、大澤さんには少し責任を持ってほしいなと思います。少し乱暴な意見ですが。

大村 田畑さんは全然違う世界から大学というところに入られたわけですが、今の両先生のやりとりを含めていかがお考えでしょうか。

田畑 私はさきほどご紹介いただいたように、学者でもなければ本職の先生でもありませんので、自分が大学を卒業してからは、ずっと外から見ていたわけですね。

本日のテーマに関連して私の印象を述べるならば、私がテレビの仕事をしていた頃は、大学生というのは、非常に理想的な視聴者であると思っていました。つまりテレビの報道、ニュースの仕事というのは、活字と違って読み直すこともできませんし、一箇所立ち止まって考えるわけにもいきませんから、なるべくやさしくしろ、というのが至上命令なわけですね。一度聞いてわからなければニュースじゃない、ということですね。しかし、なかなかそう簡単にはいかないもので、あらゆる問題をそうやさしくはできないんです。だから、どうしてもある程度の固さを残してそのまま放送しなければならぬことがよくあるわけですが、その時に心のどこかで「近所のおじさん、おばさんにはわからなくても、大学生が聞いてくれればわかるだろう」というところに、救いを求め

てやってたんですね。

しかし、その仕事の後、私は本来こんなところに座ってなくて、TBSの社長になっているはずだったんですが、(笑い)、いろいろと悪いやつがついて、私は香港に飛ばされてしまいました。その時に、非常に意外な出来事にぶつかったんです。

日本と中国の間には尖閣列島というややこしい問題があります。あれは何年かにいっぺんずつ火を吹いて大きな大衆運動に発展するわけですが、私が香港にいる間にもそういうことが起きました。香港の活動家と日本の警備艇との間でトラブルがあって一人が死ぬという事件が起ったのです。そしてアメリカでも、台湾でも、香港でも、大陸でも、いわゆる中国人社会では尖閣列島、中国語では釣魚島と言いますが、「釣魚島を守れ」という運動が起りました。

その時、上海にある復旦大学という有名な大学で、学生たちがこの問題についての討論会を開くことになったんです。日本からもたくさんの留学生が行っていますので、中国の学生たちは「日本人の学生も参加して日本の立場を述べてくれ、私たちと討論しよう」と誘いをかけたんです。ところが、大勢いる日本人留学生たちの中で、誰ひとりそれに応じて討論会に参加しようとはしなかったという記事が香港の週刊誌に掲載されたんです。その時、私が理想的視聴者だと思っていたわが国の大学生は、一体どうなっているのかな、と思いました。

その後、間違っって今はこういう仕事をしているわけですが、どちらが間違いだったかということを見ると、おそらく以前の私が、先ほどの大学の“S1”に惑わされていたに過ぎなかったということがわかってきたわけです。しかも、さらに驚くべきことが昨年起ったのです。

例のユーゴスラビアのコソボ爆撃で、アメリカ軍機が中国大使館を誤って爆撃するという事件が起りました。あの時、中国の大学では反米運動が広がったのですが、浙江省にある杭州大学で、昨年ある騒ぎが起りました。中国の学生たちが集会を開いたり、討論を行ったり、周囲に反米のスローガンを掲げている中で、日本人留学生が、中国の大学生が書いているスローガンや檄文めがけて、サッカーのボールをわざと蹴りつけて遊んで

いたのです。そこで中国人の学生が激昂し、日本人学生は宿舎に逃げ帰ったわけですが、中国人学生たちがその男を出せ、とってトラブルになったわけです。杭州大学と神奈川大学とは提携関係を結んでおり、私どもの大学からも留学生が行っておりますので、まさかうちの学生じゃないだろうかと緊張しましたが、そうではありませんでした。結局その学生は退学ということで騒ぎは終わったのです。

この出来事に驚きはしましたが、実は尖閣列島の時ほどは驚きませんでした。大学に入ってみると、学生たちは今の世界や、その世界の中で自分たちがどういう位置にいるか、すなわち時間的にも空間的にも、自分の位置を相対的に確認するということが、非常に関心が薄いのです。尖閣列島の問題はたしかに非常に複雑であり、みんながみんな知らなければならないということはないかもしれませんが、しかし、中国に留学する以上、日本と中国の間のほとんど唯一の法律的な係争問題について何の知識もなく行くということが信じられなかったのです。

しかし昨年起きた事件は、私が思うに、杭州大学に行っていた日本人学生は、その時コソボで何が起こっているのかが分かっていなかったのだと思います。簡単に日本の新聞やテレビも見ることはいけませんので、おそらく彼はなんにも知らなかった。だから、突然中国人学生たちが目の色を変えて運動を始めた時、ちょうど周りの大人が自分の知らない話を始めた時の小さな子どものように、ギャーギャー騒いで自分に注意を引き付けようとする、自分を誇示しようとするといった動機で、周囲に反応したのではないかと思います。何もアメリカの立場を支持するとか、中国の立場に反対するとかではなく、ただ自分にわからないことを周りの学生が行っていることに対して、子どもっぽく反応しただけだと考えると非常に分かりやすい行動です。

私は自分がジャーナリストの仕事をしていたから思うわけではありませんが、今こそ学生諸君が、自分たちが今どういう位置にいるのかということに関心を持たないことが、非常に不思議です。皆さんの中で毎日、新聞を読んでいる人がどれくらいいるかわかりませんが、いろんな学校で

聞いてみても、新聞に対する関心は非常に低いですね。昔は、日露戦争が起ったことも終わったことも知らずに研究していた、という有名な先生がいて、「あの先生は偉い」とか言われていましたし、あるいは夏目漱石の『吾輩は猫である』の苦沙弥先生は、「雨が降っているのに、どうしてグッド・モーニングですか?」と言われて考えこんでしまった、というような浮世離れた先生が偉いとされていて、きっとそれも“S1”に貢献したのだと思うのですが、今はそういう時代ではないことははっきりしています。

皆さんが専門の勉強をされることはもちろん大切だと思いますが、そういう自分の位置感覚の欠如というものを、私は今強く感じています。

大村 さて、横田さんはもともと音楽を専攻されておられたようですが、関西学院大学大学院の修士課程を卒業されたあと、臨床心理士として現場で活動されるかたわら、本学のドクターコースに戻られて、学位をおとりになられたとお伺いしています。現場というのは非常にシビアで、たとえばエイズの患者さんや肺癌末期の方々との切羽詰まった場面で、ケースワーカーとしてお仕事をなさっておられるそうです。

大澤さんの同世代の方として感じておられることがあればお話いただきたいと思います。

横田 世代で切られてしまうとびっくりしてしまいますが（笑い）、私は“権威”という言葉に思いを寄せながら、諸先生方のお話を聞きしておりました。田畑先生の尖閣列島から、いきなり短い距離感、息づかいが聞こえるような身近な日常生活における例を引きながら、お話をさせていただきたいと思います。

先ほどのご紹介にもありましたが、私は昨年の3月まで本大学の大学院で学生をしておりました。そしてこの3月に学位を受けたわけですが、同じ社会学部と言いましても、ソーシャルワークすなわち福祉の領域といわゆる社会学の領域とでは、権威の追っかけ方が違うんじゃないかなという気がします。と言いますのは、ソーシャルワークはヒューマンサービスの中に入るわけですが、ヒューマンサービスとは看護婦さんやお医者さん、ワーカーやカウンセラーといった、いわゆる人と人との距離が近い、息づかいが聞こえるよう

なやりとりの世界、あるいは実際に手が触れるような世界で紡ぎ出されていく関係性、日常を少し出たくらいの距離感の世界です。そういう世界がもともと豊かにあった文化というのは口承文化、口伝えの文化なんです。

このヒューマンサービスの領域がものすごくブームになって、学問っぽくなりたいたいという志向が出てきたのは、つい10年～15年前のことです。今、福祉の領域とか心理の領域が、権威、それも管理的な権威を追い求めたがる領域、もう少し違う言葉で申し上げるならば、話し言葉ではなく、泥と砂を練り上げて、書き言葉の世界を作って、なんとかそこに入ってしまうという領域になってしまっているのではないかということ、大学院に戻って3年間、かなりのハードスケジュールで勉強させていただいて感じています。

おそらく30年ぐらいの感じで、スタイルが後についていっているのかなと思います。今みんな「大学の知」とか「大学の権威」をとらえ直そうとしているこの状況で、近代的な権威のスタイルを追いかけていくことに意味があるのかな、というのが私のスタンスであり、私のものの受け止め方です。

“学識経験者”という単語がありますが、ヒューマンサービスの領域で学識経験者というのは非常に権威があり、また権力を持っています。私たちは経験の中からいろんなことを紡ぎ出して、その文脈に依存した中できめ細やかな知性を紡ぎ出していくところにいるのですが、“学識経験者”という人は、その世界の専門家というラベルを持っている人たちです。その人たちが日々行われているヒューマンサービスの現場に來られて、抽象的な「知」を授けてくださいます。そのことによって、勉強にはなるんだけど勉強にならない、ということを永遠に繰り返しています。そういう形でことが進んでいます。

私は十数年ずっと、人と人との関係の中に埋没することが、別に嫌ではありませんでした。むしろ好きだったんです。今でもこの仕事は大好きです。大学の教員の仕事で給料をもらっていますが、やっぱり私は、息づかいが聞こえる距離感で人と人がいることがとても好きな人間なんです。しかし、その仕事が好きだったにもかかわら

ず、どうして大学院に戻ってきたのか。それは、私たちの領域で行われている“学識経験者”たちから見た思いに対するある種の抵抗感を感じていたからだと思います。

昨日、若い同僚と話をしていたのですが、面白いことに、“学位”には二通りある。私たちのような日常世界で仕事をしながら生きている人間が、リカレントに戻ってきて学位を取るこの意味には二通りある、ということです。まず一方は、“囚われの学位”をもらいます。すなわち、学位を取って大学に就職してから、書き言葉の人になってしまうわけですね。人間としては一つの方向がはっきりしてくるということかもしれませんが、こちら側の世界の価値観、いわゆるフォーマットにのっとった人間になっていくんです。もう一方は“解放の学位”です。学位というある種の権威を得ることによって、より自由になることができるものです。「たぶん、君のは後者だよ」とその同僚が言ってくれたのですが、“解放の学位”というのは、おそらくこういう話を、こういう場でしゃべれることじゃないかなと思うんです。私はパートの専門職をずっとやっていたわけですが、こういう話をパートの専門職のおばさんが地べたでブツブツ言っている、あんまり引力がなかったし、聞いてくれる人はいないわけですが、いったんこっち側の世界へ来て、論文の書き方だとか、ここでの言葉の使い方、いろいろな作法というものを覚えた上で、もう一回地べたの言葉に戻るということは、人間の学位による解放だと思えます。

1週間くらい前から、今日はどういう語りをするかと悩んでいたわけですが、たとえばレジュメみたいなものをつくってきれいにまとめることもできるだろうし、あるいは諸先生方の話を受けて、その抽象的な議論に加わっていくこともできるだろうとも思いました。でも、この名だたる先生方の後に、私は付け足しで入っていますので、やはり“付け足しの言説”をやりたいと思ったんです。付け足してすごく大事なことだと思います。付け足してというのは予定を崩したり、不愉快だったり、意外だったり、いらだたせたりするとも思うのですが、次の展開を待ち望ませるような効果を持っています。ですから、あえて

“付け足しの言説”、“おんな・子どもの語り口”みたいなものにこだわって2時間過ごさせていただきたいな、というちょっとした決意を持ってこの場に上がりました。

大村 “付け足しの言説”を具体的にさせていただいても結構でございますが、ちょっと挑発的に言えば、横田さんには怒りもあったのでは、と思いますがいかがでしょうか。

横田 “怒り”っていうのは、先ほどから申し上げているようなことですね。日常を生きる言葉とか、日常性の中で、「本当は他人のことを語れるのか」という思いが、私の中にずっとあったんです。

ソーシャルワークを大学院の後期課程3年間でやることはものすごくしんどいんです。アメリカ型でしぼられまして、ずっとリサーチの勉強をしていました。リサーチは、それなりに生きていく糧になりますし、教員としては生活の足しにもなります。でも、リサーチを行いながら、私にはずっとひとつの疑問がありました。それは、「どうして人のことを調べるといことが有り得るのか、やっいいのか」ということです。もっと平たく言うならば、「誰のためにやっているのか」「調査された方はどうなのか」ということです。

大学院生になりますと、教員一人に就いて語ったり、あるいはゼミでいろんなディスカッションをしたり、とにかく言葉が増えるんです。私は職業柄、徹底的に言葉にこだわるんですが、「他人のことを語ることがはたしてできるのか」ということが3年間とてもしんどかったことです。食べるためにやっているということはわかっていますが、ソーシャルワークという社会学部の中で一番地べたに近い、日常的な学問領域において、私ではない人のこと、たとえばアルコール依存症の人の話をするとするならば、自分自身がそのことに対して当事者性がないことを、こういう場で語ることに意味があるのか、ということ。また、セクシャリティの問題にしても、ゲイの人の話を他人ごとのように語るとい雰囲気の場合には耐えられない、といったようなことをいろいろと考えていたんです。

一体リサーチって何だろう？ と3年間リサーチの勉強をしながら考えて、最近になって「そう

言えばエスノメソドロロジーも、そういうことを言ってるよな」と気がついたんです。そうやって、後から概念や言葉がついてくるんです。

日常の語り言葉が書き言葉に直されていってしまうこと、そして直されてしまったものが評価されて、豊かな語りの部分がどんどん切られていくことに対する憤りみたいなものを再認識した上で、それでも社会学の学位を持って出ていった、という感じです。

大村 リサーチの問題についてですが、私自身が臨床社会学の立場から考えていますのは、社会学はあまり専門性に閉じこもってもだめなんだ、社会調査で得たデータ蓄積を通して、積極的な政策提言にも「社会的知」が生かされるべきではないだろうか、ということです。大変難しい問題ではありますが、大学が“S1”を持ってずに“S2”、“S2”型の知、すなわち情報集積だけにならざるを得ないひとつの理由がここにあるのではないのでしょうか。

リスク社会というものも少しお話されましたが、八方ふさがりというか、各所にトレードオフのような関係が出てきているようにも感じられます。結局、パフォーマンスとか、倫理的な提言、政策的な提言ができない。あっちを立てたらこっちが立たない。いくら情報集積をしても、積極的なパフォーマンスにバリューをつけてものが言えるという状況を導き出せないということが、我々の周辺にいっぱいあります。このことが、「大学の知」が、ラカンの言ったような価値を持ってなくなった一つの理由としてあげられるのではないのでしょうか。この点が、先ほど鷺田先生のお話にもありました加藤尚武氏の「古典に戻す」といったことにも関連するのではないかと思います。

鷺田 2つだけ言わせてください。社会学は、1970年代までは実証科学と呼ばれていました。僕が尊敬する故・甲田和衛先生[大阪大学名誉教授、もと放送大学学長]は「社会学ってなんや、学問とちゃうんやないか」と言ったんです。「社会学は学問のようなものだけれども、それは科学であり、実証科学であり経験科学である」と。では、「実証科学って一体なんや」と聞きますと、それは「調査して、そこから一つの解答を導くこ

とだ」とおっしゃいました。その時僕は納得したんですが、大澤さんがやっておられる学問は、ほとんど僕のに近くて、先ほど横田さんがおっしゃったこととは違う意味で、「学門知」がもっている一番純粹テオリックな部分を、もう一度日常言語に戻して訴えていくという作業もやっているのだと思います。僕なんかは日常言語ばかりやっているから、最近ネットを見ると「お前は一体哲学者か」「非哲学者だ」というようなことばかり書かれています（笑）。

要するに、一つは、往復作業を常にしていないと不安だということです。社会科学というのは、つい最近実証科学として鳴り亘ってきた学問だから、逆に何でも言えるという楽しみがあって、大澤さんのスタンスが広いのもさうだろうな、と思っています。

もう一つは、解けない問題というのは存在しないわけで、完全に解けるとか、これは完璧な答えを出せよ、という問題が解けないだけなんです。そんなに悩んだったら19世紀の解答を、たとえばエイズになったら、最低限自分がエイズだということを相手に言おうじゃないか。そうすると相手もその人に対してエイズの患者として対処するようになるわけです。すなわち、最低限自分の情報を告知して、自分を正当なものとして扱ってほしいという、これは18世紀か19世紀に出てきた人権の基本です。加藤さんはそれを、「ものすごい人権侵害であり、圧迫だ」と言っていますが、僕はひとつの解答だと思います。そういう意味では解答はあるんですが、決定的、絶対的な神のような解答なんていうのは昔からありえなかったし、あったと言う人はみんな失敗しました。

だから、その点では僕はそんなに環境問題とかについては悩んでいないけど、学問の行方について言えば、今まであった学問とは大分違って思うように思います。だって、僕とか大澤さんが、一応大学の教師として同じように名前を連ねているというのが、なんだか不思議な気がするんです。**大澤** 誤解のないように言っておきたいんですが、僕は社会学だけをしてるわけではないので、あまり気にしないほうがいいと思うんです。

それと古典についていえば、さっきの僕の“S1”とか“S2”という話にもちょっと関係があ

るんですが、古典を読むかどうかということは、そこに答えを期待できるかどうかだと思うんです。昔はヘーゲルやマルクスを読んで、本当にそこに答えがあるような気がした時期があったんです。だからみんな読んだんですけれども、今は若い研究者も含めて、古典の中に答えがあるとは思っていない。反対に言えば、シャーロック・ホームズが古典だとは思っていないと思います。田中美知太郎さんは「プラトンを読めば全部わかる」とおっしゃってますが、まあ、田中さんぐらい偉い人であれば、それでいいかもしれませんが（笑）、今の僕らがプラトンを読んで、臓器移植法案についてどうしようか、なんていう問題に答えが出せるとは思っていないと思うんです。それも「大学の知」が崩壊していることの一つの現れだと思います。

大学できっちりと本を読む仕事をされている文化系の人たちは、大半の時間を本を読むということに費やされるわけですよ。そしたら、少なくとも大学の先生がやらなければならないことは、たとえば何十年もヘーゲルを読み続けてきたというのなら、それなりのことをやってほしいということです。つまりどういうことかということ、ヘーゲルのことについて詳しいのは当たり前なんです。僕らの直面している社会や人生の課題に対してそれなりのことを言ってほしいということです。つまり、「やっぱ、ヘーゲル読んでるやつは違うわ」というようなことがあった時に、はじめてみんな「俺もヘーゲル読もう」と思うわけです。だけど、いくらヘーゲルを読んでいても、実際に言ってることがたいしたことのない人がいっぱいいるんです。ハイデッガーもヘーゲルもプラトンも読んでるし、ギリシャ哲学の知識は山ほどあるのに、教授会で言ってること聞いたら、どうってことのない人がいっぱいいる（笑）。そうすると、何のためにやってるのかと思ってしまいます。僕らだって思うし、学生だって思うわけです。

だから、もし古典というものを一つの拠り所にしながら「知」というものを立て直すことができるのであれば、少なくともそういうことを実際にやらなければならないと思います。それだけ読んだ人は、それなりの深いことを言う、ということを実

に示すことしかない。ところが今はそういう風になっていないところが苦しいところかなと思います。

それから、パーフォーマティブなバリューがなかなか出てこないという状況的なことについて言えば、マルクス主義の退潮が影響していると思うんです。ちょっと前までは、マルクスにポジティブな人もネガティブな人も、社会科学的な知の場合、マルクスが非常に大きな柱になっていたんです。多かれ少なかれマルクス主義にシンパシーを持っている人は、形態はどうであれ、ある種のコミュニズムの可能性を信じている、そのことを想定しているわけです。だから、それぞれの関係で言っていることにパーフォーマティブなバリューが出てくるのです。もちろん社会学者の大半は、反マルクス主義的な立場をとることによって自分のポジションを確立してきたところがありますが、この場合にはネガティブな柱としてのマルクスがあって、それに対してオルターナティブなモダニストの限界みたいなものを対比することがパーフォーマティブなバリューを生んでいくんです。

もう少し状況論的に言えば、マルクス主義的な世界観というものが、コンプリヘンシブな視野を与えてくれていたこととの関係で、少なくとも社会科学や哲学の世界に関しては、自然とパーフォーマティブなバリューが出てくるようになってきたと思うんです。それが今はまったくなくなってきた、それに代わる何者もないという状態なんです。だから僕は、自分でやるしかない、自分で作るしかないと思うんですよ。マルクスがダメならヘーゲルに戻ればなんとかなるっていうものでもないという風に思っています。

鷺田 僕も古典の読み方については、まったく同意見です。70年の時に、「先生、じゃあこれから行きましょう」という時に、一つも現れなかったですからね。だから、空しかったですね。僕は大学に対する幻想はないですが……。

それともう一つ、おそらく大澤さんもそうだと思うけど、大学とか大学人に対してある程度他者としてふるまう、また社会に居ても、社会に対して他者としてふるまうということが、強烈な意識としてないと、非常に難しいと思うんです。横

田さんは地べたで生きていくんだ、とおっしゃいましたが、地べたで生きていくと違う世界がたくさんあって、それはそれで有効な世界でもあるんだ、というように、いつも第3者として自分の身を置いていくという姿勢ですね。若い人がインディファレントなのは、第3者でなくて「自分以外はいいや」というところだから、もし「学門」とか「知」とかを語ろうと思ったら、そこが重要なポイントだと思うんです。

大村 横田さんの話とも合わせて言えば、『パベルの図書館』は大変きついジョークだと思います。現代は書物の氾濫の中で、何でもすぐに書物化されてしまう時代です。その人は、それでもう社会的に発言したことになるんですね。先ほど鷺田先生がおっしゃったように、確かに恩師の中にはたいした人も、たいしたことない人もいましたが、書き言葉レベルで言えば概して寡黙であったように思います。出版するためにはかなりの覚悟が必要だったわけです。今は何でもないものでも簡単に書物になってしまうところがありますので、その中から玉のようなものを探すと自体が大変だと思います。

横田さんが提起された日常言説というか、普通の言葉で、大澤さんがおっしゃる「それなりのこと言えよ」ということですが、たとえばマスコミの場なんかに出てきても、学術用語そのままでは通じないわけですから、ふつうの日常用語で語った上で、なおかつそれなりの学問を積んだ人だと思わせるような具体的な話について、鷺田先生いかがですか。

鷺田 僕はあまり研究もしていないけど、一つだけやりたいことは、自分ひとりで哲学辞典を書きたいんです。そこにはもちろん学問的なタームを飾りますが、誰でも読めるような辞典を書きたい。ただ、さっき先生が「昔の人はいい論文を書いた」とおっしゃいましたが、僕は一つも読んでいません。それは社会学のことなのかな、と思ったんですけど、清水幾太郎先生のは哲学思想に近いので読みましたが、他はほとんど読んでいないので、もしいい人がいたら教えてください。今までの先生方ではいなかったなあ……。

大村 社会学ではいなかったですね。

大澤 その点なんですよ。ほんとにそういうの

があるかどうかってこと。あるという仮定で、みんな生きてきたんですよ。

鷺田 それはわかるんです。僕も権威があると思って仰いでいったんだけど、「なんやこんな論文書いて。あれだけ偉いこと言っといて、こんな論文しか書けないのか」というギャップが大きいんです。一面では間違いなんだけど、実感としてはそうです。

大澤 先ほど田畑さんがおっしゃった「新聞を読まない」ということにも関係があるんですが、かつては活字の文化というものが、ちょうど「ホームズの知」にあたるものを与えてくれたんです。つまり、誰でも普通に生きている経験というものはローカルで、部分的でしかないわけですが、一体俺が生きている世界は何なんだろう、ということを活字の世界で見るという行為なんです。ちょっと深く知りたかったら本で読むし、とりあえず知りたかったら新聞で読むわけです。新聞にはナショナルなことやグローバルなことが書いてあるわけですから。つまり、ホームズが見ているものを、新聞を通じて獲得するというをやっていたわけです。

しかし、「バベルの図書館」のイメージとして一番いいのがインターネットの世界です。ここには新聞よりはるかに情報があるわけです。ちょっとしたこと、たとえば大澤真幸なんていうマイナーな人のことを検索すれば、ぱっと情報が出てきます。これはちょうどさっきの「バベルの図書館」状態になっているんです。あまりにもものすごい量の情報があって、僕についての真実を知りたいと思ったらどこを見ればいいのか分からない。しかも本当か嘘かも分からない。そこに書いてあることに関しては誰にも責任がないんです。

今の僕らは、おそらく新聞や活字に対する信頼感を失っている。しかし、それに代わって情報を手にいれようとするのがインターネットの世界なわけですが、ちょうど『バベルの図書館』に入れられたような状態になっているわけです。情報がいくらでもあるが故に、かえっていつもローカルなものしかわからないという状況になっているんじゃないかなと思います。

本に関しても、わりと安易に出版されやすく

なっていますが、本の世界もインターネットの世界観の方に引きずられているような感じだと思います。

田畑 まさに、おっしゃる通りなんですよ。私はさきほどの経験から、「今の学生さんにはもう少し、今我々がどういう時代に生きているのかということを大学で教えたほうがいいんじゃないか」と提案したことがあるんです。それは極めて簡単なことで、わりと最近の歴史とか、今世界で起っていることを解説する、といったことです。それを提案したら、非常に典型的な先生からは、「そんなものは必要ない。あなたの言うように、たまたま尖閣列島について知らない学生が多かったかもしれないけれども、尖閣列島についてインターネットで調べれば、すぐに知識は得られたはずなんだよ。そういうものを、何も大学で教えることはない。そういう雑学はあまり意味がない」と言われました。

非常に不思議なんですが、大学というところは生きた学問を教えなければならないわけなんです。では、経営学部なんていうところでは何を考えるかということ、どこかの会社にただで働かせてもらって、会社のシステムやらいろんなことを身につけてこい、というんです。あるいはもっと役立つ勉強ということで、極めて実践的な入社試験突破法みたいなものをやるべきだ、というわけなんです。

そうなのかもしれないなとも思うんですが、大学が変質したことによって、私は二つのことがごちゃごちゃになっていると思うんです。一つは、昔の大学は数も少なかったし、先生も偉かったし、おのずと権威があって、そこでやっていることと実社会とはあまり関係がなくても、むしろ関係がないことの方が偉そうに見えたという面があります。だから、たとえば高等学校で教えるような世界史だとか、日本史だとか、政治経済だとかを大学でやることはないという意識が、かつての大学のイメージの中から出てくるんです。しかし同時に、大学進学率が40%という時代ですから、大学を出たからって別に偉くはないわけです。そうすると極めて実践的に、なんとか落伍市民にならないための基本的な技術を身につけさせることを考えざるを得ない。

その両方から、私なんかが考えると一番大事だ
と思うことが、するするっと抜け落ちていくよう
な気がするんです。

私はこういう仕事をしてきたから思うのかもし
れませんが、ジャーナリズムというのは情報を流
すことではないんです。どんなものでもあれ、整
理することがジャーナリズムです。だから、イン
ターネットにいくら情報があっても、何の整理も
なされていない知識はまさに「バベルの図書館」
であって、あることはわかっている、それに接
触しても何も分からないから、みんな接触しな
くなるわけです。

では、若者の40%が大学に来るという時代に、
大学は何をしなければならないかという、関西
学院大学のごく良質の大学は、いろいろな
専門技術者を育てることも必要でしょうが、主と
して我々は、賢明な市民を育てることを大切にす
べきだと思うんです。

先ほどから古典に解答を求めるといってお話も出
ていますが、この中でおそらく私が最年長かもし
れないので言わせてもらえば、今は本当に、誰
も、何もわからない時代だと思います。20世紀は
戦争と工業化の時代と言われてきましたが、工業
化が行き詰まったことははっきりしています。
もっと言えば、17世紀からヨーロッパで始まった
科学革命というものが、社会を運営する大きな原
理にはなりえません。むしろ150年前にマルクス
が言ったことが、新しい意味を持って甦ってくる
という感じがします。そういう時だから解答を求
めても難しい、ということは先生方が一番よくわ
かっているはずなので、少なくとも、若い人たち
に前の世代として伝えることは、どういう経過で
こういう風になってきたか、そして我々が生きて
いる同時代の空間的なひろがりの中で今何が起
きているのか、ということをもどのようにして見て
いくかという技術を教えることしかないんじゃない
かと思います。

私は現代中国なんかをやっていますので思うの
ですが、確かに研究者と称する人たちは、ある特
定の時期の特定の場所における特定の問題につ
いて、たまたま資料が見つかったから論文をひとつ
書くということをしてします。そして、時間的に、空
間的に、問題別に、立体的な大きな箱を作って、

それをひとつずつみんなで埋めて、全部埋め終
わった時に現代中国をすべて理解できる、とい
った前提で作業をしているように見えます。しか
し、そんなものは埋りっこないし、ちょっと時間
がたつと一つ埋めたものが陳腐化してどうにも
なくなる。非常に無意味な作業をしているよう
に見えることもあります。だからそれよりは、
せっかく学問してきたその方法を若い人に教えて
いくしか、我々にはすることがないんじゃないか
なと思うんです。

大村 “方法”とおっしゃると、具体的には？

田畑 一つには、今の世界はなんでこういう世界
なのかということ、その見方を教えることだと
思うんですけど。

大澤 それがまた難しいんですね。たとえば、
おそらく新聞には大切なことが書いてあるわけ
でしょうが、それはその新聞を編集する記者が重要
だということを書いていくわけです。問題は、読
む方がその選択基準に、自分をコミットできるか
どうか、我がものとして引き受ける気分になるか
どうかということなんです。たとえば先ほどの尖
閣列島の話にしても、調べる気になれば調べられ
るんです。問題は調べる気になるかどうかです。
ある人にとっては確かに重要な問題なんです
が、おそらくそれが重要な問題だということ
を説得するのが非常に難しいんです。たと
えば、日本の戦争問題というのは非常に重要な
わけですが、今の僕らは明らかに戦後に生
きていて、ほとんどの人が戦後生まれにな
って、なぜ自分にとってそんなことが重要
なのか、なぜそれが私の問題なのか、
という風になるわけです。

昔は共通のコードみたいなものがあって、それ
はなんらかの上で私たちの問題であるという共通
の了解があって、そのフォーマットにしたがって
何が重要で、何が重要でないかということ
排除しながらやっていたわけです。でも、今
は何が重要かが分からない。なぜなら、
そういう選択そのもの、すなわちやり方
自体が共有されていないから
です。戦争についての語り方も、
今までのものでは自分にとって疎遠
なものになってしまう。だから『戦
争論』みたいなものが出てきて、
そういう日本の近代史の基本的な
ことでさえ、歴史の見直しをしな
くしてはならないといったような話になっ

てきちゃうんですね。

何が重要かということピックアップする技術そのものが共有されていない、字面に何が重要かということが言えない状況なんだと思います。

田畑 私はいつも若い人を見ると思うんだけど、今、これだけ工業生産力が上がったけれども、世界中のどこの国でも政府の抱えている一番頭の痛い問題は失業者が多くなる、老人が多くなる、ということです。私たちは幸いなことに、私の隣に並んでいる先生方の保険金で年金をいただいています。間もなく君たちが働いて、私以外の先生の年金を払うわけです。でも君たちが年を取った時に、君たちに年金をくれる人は非常に少なくなるわけです。そんなことは分かりきっているわけですが、じゃあどうすればいいかということについては誰からも解答がないわけです。

鷲田 いや、田畑先生、分かりきってるなんていうのは、ちょっと間違いですよ。

田畑 私はどうしてそういう簡単な、目の前に見えている大きな問題について、若い人がわりと平気であるのが、不思議でしょうがありません。おそらく今度の選挙でも大勢が棄権するであろう。ただ、自分が年を取って分かってきたことは、若い人は自分の体力に自信があるだけに、そういう問題について傲慢ですね。自分たちは元気がいいから、自分はなんとかなると思っているんですよ。でも、年をとってくると体力がなくなってきましたから、そういう問題が自分の身に降りかかった時にどうするかということに、ナーバスになりますよね。それはやっぱり若い人の傲慢であって、後悔することになるわけです。特に、これから人生やる人はほんとに大変だと思う。僕は学校を卒業してからちょうど日本の高度成長期にあたったから、あまりものを考えないで年をとることができたけど、君たちは年をとることさえ容易でない時代で生きていかなければなりません。それなのに、どうしてみんな安心した顔をしていられるのかな、と私は不思議でなりません。

大村 鷲田先生、さっきおっしゃりかけたことは……。

鷲田 いや、一つは老人がたくさん増えて若い人が背負わなければならないという仕組みが目に見えている、ということに関して僕は違う認識を

持っているから、それはそれでいいんです。ただ、すべての若い人がそうだろうと思うのは、自分の身に降りかかる前に、10年後のことを考えて賢明に生きるような人間が多かったら、そんなに悪い社会にはならないと思います。だけど、自分の身に降りかかるまでは賢明にはなれないんですね。それが、人間の特性というか、本性であると理解して、その上で何をするかということが問題なんだと思います。

以前に、吉村作治さんというエジプト学の人と対談した時に、「お前ら勉強しなかったら後から苦勞するぞ。今しなかったら大変な目にあうぞ」って、なんぼ言っても、その時になくなっちゃ分からない。何か違う言い方がないかって、僕は探してるんだけどなかなか見当たらない。つまり、罰が当たるぞ、という規則が通用する世界は、今なかなか難しいんじゃないでしょうか。オウム真理教みたいなどころもあるので、特殊などころではあるかもしれませんが。「ひどい目にあうぞ」って自分の子どもにいくら言っても「へっ、へっ」と笑ってますからね。僕自身も「そんないい加減なことやってると、罰が当たるぞ」と言われた時に、「どうせ、父さんと母さんに先に当たるから、いいよ」となめて言ってましたが、田畑先生がいわれたように、やっぱり罰が当たりました（笑）。当たるけども、人はそれほど未来に対しては賢明にありえないということ、ちゃんと自分たちの生き方の中に入れておいたらいいんじゃないでしょうかね。そのことについては、それ以上に僕は言えません。

大村 田畑先生がおっしゃっておられることは、ある種のリアリズムみたいな感覚だと思うんですが、学問から学んでくるものはある種の理屈なんですね。書き物から得たというか、実感にぴたと沿っているというよりは、頭の体操のようにして持っているもので、一種のノミナリズムであったり、理想からフィクションへとおっしゃっているものに支えられざるを得ないという感じがします。それが頭のこのあたりで理屈としてはわかっているつもりなんですね。ただ、おそらく田畑さんがおっしゃっていることと横田さんが少し違う方向からおっしゃったように、生きている実感というか、歴史的に自分の存在、リアリティみたいな

ものが、あまりにも軽佻浮薄である。それは、生活実感に由来するもので、やがて年をとってくれば、ということかも……

鷺田 いや僕は、そういう言い方を教育の中に持ち込んでも、あまり効果は上がらないと思うんです。そうではない違うやり方が、大学で得られる技術とか教え方だと思ふし、それについては少し苦勞してると思うんです。いわゆる「俺は（間違っ）こんな苦勞をしてきたんだから、だから、おまえはその苦勞の轍を踏むんじゃないよ」っていう言い方は、賢い教育の言い方ではないと思います。もちろん田畑さんもそんな言い方はなさらないと思いますけれど。ただ、僕らの世代は本当に歴史を学んでこなかったから、大変苦勞しています。歴史感覚というのは本当に欠如していますね。

横田 鷺田先生に質問も兼ねてなんですが、先ほど、他者としてふるまうことの大事さもあると述べられたんですが、他者の問題として、ある事象なり関係をとらえる時に、まず他者としてとらえ得るといふことがありうるのかということと、その時、他者としてまなごしをかけられた相手は、痛くないのだろうか、ということを考えながら聞いていたのですが。

鷺田 僕の気持ちの中では、自分の身になって人が考えてくれたら気持ちが悪い、という思いがあるんです。僕自身の気持ちになって自分を考えてみると気持ちが悪いからそう思うんですけど、これは僕の特性かもしれません。つまり、人のいらなところで同情されたり、いらなところで内面を語らなければならぬ場面に立ったら、まあいいやと思ってしまう。それは、自分のふるまいの中や書き言葉の中、あるいは人との付き合いの中で表現していくことなんです。だから、カウンセラーの人は大変だと思います。

ただ、僕も10年間ぐらいボランティアで福祉関係の仕事の理事長をやってきて、指導員とずっと付き合いってきましたけれども、他者として自分をたてるということが全然ないんですね。要するに、相手と同じ水準に立てばいいんだ、というところと向き合っていると、結果として自分の目線やパフォーマンスがどんどん低下してくるんです。これは僕の経験から言ってるんで、もし違

うことがあるのなら、いろいろと実践されている横田さんに教えていただきたいと思います。

横田 いえ、最後のフレーズなんて、とても感心させられました。ただ、私たちが紡いでいく日常の人間関係の中には、同情っていうものはないと思うんです。先ほどの自分の身に降りかかるまで分からないという話につながってくるのですが、同情ではなくて、ある程度、自分がそうであればと置き換えられる可能性ぐらいまで現実にかかないと、他者とは関係を均一にできないと考えています。

鷺田 僕はわりと人に影響を与えるほうなんで、できるだけ影響を与えないようにしているんです。かつての経験もあるんですが、これでも僕は40歳ぐらいまではバリバリのコミュニストだったんです。いんちきコミュニストだ、と言われましたけど。だから、自分の言葉が人に異常な影響を与えているという経験を何度もしたんで、学生や、自分の子どもや妻にも、なるべく影響を与えないような言い方をしようとしています。でも、それは難しいかな。

横田 それはお互いに対峙しあうだけでなく、お互いに与えられるという双方向的な可能性に行っちゃうんじゃないかな、と思うんですけど。

鷺田 それはそうですね。

横田 それと、人は思ったほど相手に影響を与えられない、ということもあると思います。

鷺田 いや、そう思ってたんですけども、思った以上に影響を与える人間らしいんです。人にそう言われるんですよ。もちろん悪い影響ですよ。

大澤 今の議論を聞いてて思ったんですけど、横田さんが感じておられることと、田畑さんが考えていることとは、実は対立するというか、潜在的に逆方向なんですよ。今、横田さんがちらっとおっしゃいましたが、僕らにとって本当に深刻な問題というのは、やっぱり自分の問題なんです。人間っていうのは自分の運命を引き受けるというところがあって、つまり、引き受けなくなったら関係がなくなるわけです。先ほどの田畑さんのお話のように、ちょっと冷静に考えてみれば、今の人たちがどんなに悲惨なことになるか、客観的には分かるわけです。ただ、今の学生は馬鹿だから分からないわけではないですよ。昔と同じくら

い賢明なんです。賢明なんだけれども、自分の運命として引き受けているかということが問題で、それは客観的な認識とは違う部分なんです。はっきり言えば、宇宙のすべてが関連していますから、ビックバンからすべて、自分に関係があるといえ、あるんです。しかし、その中のある部分を、人は自分のものとして引き受けるということをやります。その時に、たとえばある人は戦後生まれだとしても、自分の父母が関係した戦争というものを自分の運命の中に引き受けている人もいれば、それは自分のスコープに入っていない人もいます。あるいは、自分の子どもや孫の環境問題のことまで気になる人もいれば、あるいは自分ももらう年金のことまで気になる人もいれば、そんなことは今の自分の問題ではない、と思う人もいます。

横田さんがおっしゃるのは、本当に深刻な問題は私の問題なんだ、私が本当に実感できる問題から出発したい、ということだと思うんです。それはある意味で非常に素晴らしいことだと思うのですが、他方では田畑さんの考えていることとは逆行するんです。つまり将来の自分というのは、ある意味で自分にとって他者なんです。ほんとの自分というのは今ここの自分であり、そこから出発しようとする、うまくいけば非常に成功しますが、逆に言うと、田畑さんが憂いているような視野の狭い生き方になっていくということもあるんです。

横田さんがひそかに理想に思っているスタイルと、田畑さんが今の学生はこういうところが困るんじゃないかなと思っているやり方とは相反する、矛盾した問題だと思います。それを、どういう風に両方とも満たしていくかということが、問題なんじゃないかなと思います。

横田 その矛盾を乗り越えていく時に、どのようにスコープを広げていくかということが重要だと思うんですね。つまり、どこまで未来の自分を自分の交際範囲というか、あるいはどこまで時空的に責任を持つかという風にスコープを広げていかなければならないと、私は思います。

大村 それをどうやって広げていくかですよ。

横田 それは、やはり一人ではできないと思います。大学ってだから大事だと思うんですけど、そ

ういうことをやろうよ、という語りを、お互いがしていくような場、すなわち上から下に何かをおろす場ではなくて、やりとりが紡がれていく中でおのおののスコープが広がっていくような場として大学があったらすごくいいな、と私は思うんですけどいかがでしょうか。

鷺田 う～ん、でも共同体っていうのは無理じゃないかな。自分がまずやらないと誰も納得しないから、そこが難しいんです。僕はちょっと不遜だったから、自分の母親に学んだことをやさしく語れるようなしゃべりをしてみたいし、書いてみたいというところから出発したんですが、でも、誰もやらなかったら道化みたいになってしまいます。ひとりでまず見本を示さないと難しいね。社会福祉で共同体がそこまでいこうと思ったら、横田さんは相当頑張らなければなりません。学問っていうのは、一人でやらないと駄目なところがあるんです。

これは面白いんですけど、ひとりで構築した“知”は、負けないね。たいしたことはないんだけど、こけない。やっぱりモザイクは駄目だと思う。大澤さんが偉いのは、自分で作ろうとしているからです。彼もやっぱりごたごたしてるんです。もっとすっきりやって欲しいなと思う時もあるけれど、でも自分で創ろうとしている。僕たちの中にもそういう人はわりといるけれども、やっぱり年金をもらう時期になると体力がなくなって、やめちゃうんですよ。だから、みんなでやりましょうっていう学習スタイルはもうやめたほうがいいと、僕は随分前から言ってるんです。

大村 私自身は学問というのが好きですが、頭でわかる、概念としてわかる部分と、生活者としてわかる実感みたいなものが、ある段階からなんとなく齟齬をきたしてるんですね。だから、僕は臨床社会学という形の中で、それをどうやって取り戻そうかなと考えているわけです。ラカンの話からひっぱってきて言うと、実感の込めやすい言葉と、頭だけでひとり歩きさせてしまえるような論理の言葉とがどうクロスするのでしょうか。

大澤 一番最初に申し上げたことと関係があるんですが、僕と横田さんとは少し出発が違うなと思ったのは、僕自身は自分が日常的に使っている言葉に対して、かなり深刻な不信感があるんで

す。それが真実を述べているのか、つまり実感が真実だということへの不信感です。言葉ってというのは究極的に言えば“人”の言葉です。特に日常的な言葉というのは、ふつうに使っているから自分の言葉だとも言えますが、より一層“人”の言葉であるという面があります。だから僕は、ちょっと難しい言葉でいうと現象学的還元みたいなもので、あえて自分の中で使わなくてもいい日常言葉を排除してしまうんです。そうやって排除していったら、それでも残る部分だけは残っていく、別の言葉に置き換えられるんだったら全部置き換えていく。なおかつ残っている日常断片だけはかなりの部分で真実だから、それは使わざるを得ないんです。

そのように、十分に還元した上で、それでも残る日常言葉は使う。それでももっとコンセプトチュアルな言葉に換えられるんだったら、全部換えていきたい。そうやって理論を創っていくんです。そうすると、自分がいったん日常で生きている感覚を括弧に入れるわけですから、いわば日常感覚を多少裏切ることがあったとしても、それは引き受けなければならないわけです。しかし他方で、すべての日常言語を排除しているかといえばそうではなくて、ちょうど現象学でも究極的にレーベンズヴェルト（生活世界）は残るように、究極の土台みたいなものは残っているわけです。自分にとってここは絶対に触れない、というものが残った上で、還元できるものは全部還元したい。そういう思いで、僕は自分の学問というものを始めました。

だから、できるだけ口承言葉に還元したいという横田さんの思いとは逆なんですね。どこまで自分はテイクオフできるかということで、想像力を調節したいんです。

横田 確かにまったく逆だと思いますね。私はその人、その人の真実としての口承文化というか、話し言葉というものをさらに相乗することが関係だと思いますし、そこからどうやってアカデミックなところに飛んでいくの？と考えると飛べないかもしれない、落ちちゃうかもしれないけれども、二項対立的な「社会の知」と「大学の知」という考え方をこわしていくという、一つのやり方があるかもしれないと思うんです。

具体的な例をあげますと、私がマネージしているコースで、毎週講師を替えているものがあります。第1回目は知的障害の人が講師で、第2回目は精神障害の人が講師、そして第3回目は高校生の女の子、彼女たちは生活テンションについて人に講義をしてまわるというグループワークを学習した女学生たちです。第4回目はセックスワーカーの人が講師ということで企画しました。その時に、大学本部から知的障害者の方に関してだけクレームがついたんです。なぜ、知的障害があるということで、大学に関与する、しないということに大きな線が引かれてしまうんだらうといろいろと話しあったというエピソードがあります。

大村 ちょっと僕も道筋をつけることができなくなりましたので、フロアの方で距離を置いて見ておられる方の中から、あそこはこう突くべきだ、という意見がありましたらお願いいたします。

大澤先生に詳しい阿部先生に伺いたいのですが、阿部さんは関西学院の大学院のゼミにも参加しておられますので、学生教育という意味でも意見を聞かせたいと思います。

阿部 パネリストの先生方の思いがかなり違って、シンポジウムとしては非常に面白くて、いろいろと自分に引き付けて考えさせていただいております。ただ、一つどうしても見えてこなかったものがあります。横田さんのお話からは断片的には見えたような気がしますが、シンポジウムのタイトルである「大学の知と社会の知」についてです。

まず、大澤先生が基調講演で述べられたのは、「大学の知」が今どういう風になっているのかということであり、ジャック・ラカンの図式を使って話されたことは、それなりに「ああそうなんだな」と思いました。

また、後の議論の中では出なかったのですが、機会があったらやってほしいのは、「オタク的な知」をどういう風にとらえるかということです。私は、言ってみれば、その「オタク的な知」が今の状況を反映しているのではないかと思います。では、そうなった場合に、大学というのはまた別の「オタク的な知」に終わるのか。それともやはり、そうでないものへいくのか。おそらく大澤先生はそういうことを考えていらっしゃると思うん

ですが、だったらその可能性はどこにあるのかということを考えてみたいと思います。

ただその時に、「社会の知」なり、大学と比べた場合の社会というものが、一体今どうなっているのか、そのことが一体大学の方にどう返ってくるのか、といったことが重要なんだと思うんです。今日のお話から、「大学の知」というものが、今まで社会から期待されていたとか、今それがこういう風に提供することはできない、ということはいくつかお伺いできたのですが、発想を変えて、社会の方からもっと積極的に大学の方にどういう風なカウンターが見えてきているのか、ということを考えてみたいと思います。その場合でも、社会というものは当然一枚板ではありませんし、ざらざらしたものやゴツゴツしたぶつかり合いもあるわけですから、そういったものが大学に影響なり、力の関わり方をしているのかということです。

それとももっとラジカルに、「社会の知」というものが、大学にまったく期待せずに、大学とは離れたところにある「自立した社会の知」というものがあって、もしかしたらそこでは大澤先生がいわれたような、“S1”を必要としない、けれどもそれなりに意味のある「知」として成り立っていると、仮説的には考えられると思うんです。

“S1”がなくなってしまったことが危機であるということ、確かにそれは危機なんです、その場合の“S1”のありかた自体を規定してきた近代的な「知」の権力とか、そういうもの自体を問題視していく視点から考えたい。

なんだか小難しいことのように聞こえますが、僕が考えていることは極めて単純で、すなわち日常的な関わりの中で起っていることが、大学というものと結びつくのか、あるいは結びつかないのかということです。さらには価値的な評価として結びつくべきかと考えていくのか、それともばっさり切り離して、「社会の知」というものは面白くなくなって、オタク化して“S1”ですら保証できなくなった「大学の知」とは別のところで健全にいく可能性もあるのではないかと、ということも考えてみると面白いんじゃないかと思っています。

大村 他にご質問がございますか？

大谷 今日は4回生のゼミの時間だったんですが、学生を引き連れてやってきました。授業料をもらっている手前、何か言わないといかんかな、と思ひまして言うことにしましたが、実は休み時間にある学生に質問をされました。「先生、さっきの話、わかりましたか?」。はっきり言って、僕はよくわかりませんでした。ラカンも読んでいませんし、あれをわかったと言って話をしているところが「大学の知」なのかなあと感じております。

私は、パネリストの議論に当然そういう話が出てくるだろうと思って、その学生にはそう言いました。でも、一向に聞こえてきませんでした。大澤さんの話が本当に理解できたのかということ、私は非常に疑問です。私は社会学で実証的なことをやっていますので、理論の方はよくわかりません。だけど、私にも分からないことを学生に分かれというのは、確かに無謀なことだと思います。その点について、どうお考えなのか、それについて言えていないところが大学のもっぱらだめなところで、もっと言うべきだろうし、それが社会から離れていってしまう最大の原因ではないかと思っています。

最近私は『社会学評論』の編集委員をやっておりますが、この論文が最近つまなくなりました。大学院生が書くものが、私にはよくわからないんです。審査をしても、どっちがいいのか、どっちが正しいのかがはっきりわかりません。社会学という学問がどんどん専門分化して、特に大澤先生のように、あんなに専門用語ばかり出てくる、それが学会誌となっている状況自体が大きな問題で、そのことをもっと考えるべきだし、そのことがもっとどんどん表に出てこないことが、はっきり言って社会学なり学問の危機だと思います。これが学問で、学生の方が悪いというのは、学生に気の毒だと思います。

その点に大澤さんは答えてなかったと思うので、大澤さんはどのようにお考えなのか、その他のパネリストの方たちがどのように考えておられるのかを、ぜひお聞きしたいと思います。

大澤 まず、「わかる」「わからない」ということについては、そんなに単純なことではなくて、「わかる」と「わからない」の2種類があるわけ

ではないんです。ある意味で100%「わかる」ということはないわけですが、僕の話をつまらなかつた方もいらっしゃるだろうし、ある程度わかつたという気分になつた方もいらっしゃると思います。僕は今日、そんなに難しいことを話したつもりはございません。

ただ、今のお話で一番違和感を感じたのは、教師の私ですらわからないのに、なぜ学生にわかるのだろうかという部分で、こういう考え方は間違っていると思います。僕は学生にも言っているんですが、特に社会学とか哲学、心理学でもそうですが、ある意味で専門家のほうがよくわかると思つたら大間違いなんです。確かに専門家はある種の訓練を受けているから、コンセプトに慣れていているということはありません。あるいは、社会調査の方法などは相当テクニカルなものですから、どうやって検定するのかとか、アンケートを作るのか、といったようなことは確かにあります。しかし、これは技術的なことなんです。

僕は社会学をやっている、鷺田さんは哲学をやっている。しかし、少なくとも僕らはその訓練をやつたから深いことが言えるわけではないんです。結論的にいえば、日常的に生きているものとして持っているインサイト、すなわち直観というものがあるわけです。ただ、人間は直観的には知つていても、それをなかなか言葉にはできないんです。では、学問というのは何をするかという、直観的に自分が持っているものを、どこまで言葉にできるかということが勝負なんです。

僕は社会学というものを20何歳くらいの時からやってきて、みなさんよりは若干長めにやっている。僕よりも大村先生の方が、はるかにベテランである。しかし、そういうキャリアによってよくわかるようになったり、深くなつたりするわけではないんです。逆に言えば、みなさんだつて、何十年も社会学をやつてきた人よりも深い洞察を持っているということが、充分にあり得るわけです。ですから、訓練された大学の教員の方が、より一層理解できるだろうと思つてはいけません。究極的には全ての学問がそうなんです、特に社会学や心理学、哲学はそうだと思います。

よくわからないことの原因は、はっきり言つて専門分化にあるわけではないんです。先ほどおつ

つたように『社会学評論』によくわからない論文が出てきてるということが起つた場合、それは専門分化のせいではありません。むしろ、世界をとらえるセンスとか知識の在り方みたいなものが、どうもあるところで大きく変化してきているんですね。そのことによって、おそらく学者の中で世代間ギャップみたいなものが起きているんです。それで、よくわからない、という気分になっているんだと思います。

鷺田 大谷先生がおつたのは、おそらくそういうことではないと思いますが、要するに「今日のパネリストを含めてなつたらん」ということだと思いますね。

僕は田畑先生に聞きたいんだけど、自分が信じている頭で分かつたことと、経験で分かることは、そんなに違いますか？

田畑 頭ですっきり分かる、ということ自体がよく分からないけど、僕は35年ああいう仕事をしてきたので、分かつたことばかりなんです。だけど、そこはかなりいい加減で、分かつたような気分になるところまで調べて次にいくんです。だから、頭の中には自分が分かつた、と思つていることしかないんですが……。

鷺田 それでいいんじゃないの。

田畑 だけど、今日はなんでこんなことばかり言つてるかという、それはおそらく間違つているという気持ちが常に一方にあるんです。だから、間違つてもいいから、分かつたような気分になるまで頑張つてみたらどうか、ということだけが言いたいんです。確かに、今の世界は何も分かんないです。でも、分からないからといって、おつぱり出してるように見えるです。

たとえば、ユーゴスラビアの爆撃なんて、どうしてあんなひどいことが起つたのだろうかとまず考えます。そうすると、その前にあそこで起つていたことも相当ひどいなということがわかる。それで調べてみると、90年くらい前からそうだった。そこだけでは、人間がどうしてそんなことをするかということは分からないけれども、90年前からやつてたんなら仕方がないか、というぐらゐまでは考えたらどうでしょうか。あいつらのやつてることは全然分かんないな、で終わらないほうがいいということだけを、私は言いたいんで

す。

大村 非常によく分かりますね。僕なんかは坊さん言説というか、お坊さんの世界にいるもので、それと社会学や社会科学で学ぶこととの間で、どっちに真理があるのか、いつもウロウロしています。

他に学生の方々から、何か質問はありませんか？

学生 さっきのオタクの話なんですけど、僕はあまり本を読んでいるわけではないのですが、村上陽一郎先生が書かれた新しい科学論の中で、理系と文系が分かれたということ、そして理系と文系とが分かるような人が出てこない、環境問題や生命倫理の問題は解けないんじゃないか、とおっしゃっていたのを考えながら聞いてたんですけど。

鷺田 でも、村上先生のは非常に古典的というか常識的な答え方をしているから、本当に言いたいことは別なところにあると思います。

大村 村上陽一郎先生は臓器移植等の医療倫理とか女性売買などについていろいろと発言しておられますが、科学というのは基本的にモノの動きに還元してしかものを言えないんですね。だから、そうでないものをそこに引き込んでいったということが一番大きい……。それ以上徹することができない、だから哲学的言説とかに助けを求めたらいいんじゃないか、というようなことを書いておられます。

もう一度大澤さんにお尋ねしたいのですが、「大学の知」が、オタク的なものになってきたということ。昔はそうならなかった、つまり“S1”という意味を持ち得たというか、場の保証というものがあった理由として、先ほどおっしゃったマルクス主義があると思います。マルクス主義というのは、たしかにわが国の社会科学にとって、非常に大きな意味を持っていたんです。それに対して反対してきたのが、戦後の社会学です。これもマルクス主義が、あったからこそも言えると思います。

もうひとつは、先ほど阿部さんがおっしゃったように、大学というものを見捨てて、「社会の知」の側が、オタク的でないものを表現している場所というものについて、大澤さんの書物で見れば、

よく引用されている漫画や映画などがあると思います。しかしまた一方で、漫画というのは非常にオタク的であるとも述べられてますよね。

このように、「社会の知」として、大学が後に取り残されているのか、また克服しているのか、ということについて伺いたいと思います。たとえばオウム真理教の事件などを分析なさった時も、彼らのオタク的な部分や、同時に一方で彼らを支えていた漫画といったものを、両面から分析されたわけですよ。

最近では社会学、あるいは大学の場所としての情報提供能力の限界、といったことを言う人もいます。たとえば、古い映画的なものとか、芝居的なものとかですが、そのあたりについては、どう思われますか。

大澤 表現媒体としては、あらゆるものがなり得るんじゃないかと思いますね。自分にとって何が一番合うか、何が一番自分の表現になっていくかですが、その場合、いろんなものがあっていいと思います。ただ、言葉に期待するのはどうしてかということ、言葉っていうのは一番ユニバーサル・アイテムを作る力があるんです。たとえば音楽によって表現することもできるけども、音楽にはノリがあって、ある意味ではイクスプレッシブにその音楽がわかる範囲でひとつのアイデアを共有しあうといったところがあるんです。言葉っていうのは形式的に言うと、わからない人を説得しなくてはいけないわけですから、そういう意味で外に向かおうとしたら圧倒的なアイロニーなんですよ。そういう意味で、言語の力というものに期待したいんです。それが、大学という組織に期待できるかどうかは、また別問題ですが。

ただ、考えて見れば、もともと大学にそれほど力があったのか、ということなんです。ほんとは、それ自体がたいしたことなかったんですよ。

大村 最初の話に戻れば、ラカンの“S1”というものを何が可能にしていたのかな、と思うんです。

鷺田 社会科学の分野で言えば、企業観とか企業主義観とかをやっている研究を読む限りでは、レベルが低いですよ。それは自分の目的としているところ、すなわち最初から到達目標を決めて、その範囲内でやっているからなんです。おそろ

く、大学に期待しない、とみんな言っているけど、大学を抜きにして日本の知識や技術を考えようとすると、もしかしたら実態の薄いものになるかもしれないから、僕はあんまり結論を簡単に出す必要はないと思うんです。

企業に行ったり、企業と共同研究をやっている人は分かると思うけど、細分化しているとかではなくて、目的を設定してそれを実現するというのですから、それはそれで非常に有効だと思います。ただ、もう少し大学は違うところに足を踏み込んできたし、これからもその可能性はあるけれども、いかんせん私の目に映る大学人というのは本も読まないし、学生よりも本も読まないということが不思議でたまりません。いやそんなことはない、立派な先生もいるよ、ということであれば教えていただきたいのですが、僕はあんまり見たことはありません。にもかかわらず、そこに何がしかの自分の学問的なキャリアと研究成果を発表していくとしたら、もう少し審査をきつくしたり、発表をきつくしたり、総合討論を行ったりして、僕みたいな人間がいたら辞任勧告をすとかしてもいいと思います。

企業とか社会とかジャーナリズムという人たちと比べたら、情報量はそんなに違わないと思うけれども、やっていることはたいしたことはないということが、議論すればすぐわかります。だから僕は、大学の先生が怠惰なだけだ、自信を少し失っているに過ぎないのかな、と最近思うようになりました。

大村 大澤さんが“データ公害”というようなことをおっしゃいましたが、企業やマスコミが簡単にデータとって、いろんな数字を流しています。これらは、我々社会学のきちんとしたデータ処理法から見れば非常に疑わしいものが多いわけですが、それらが大手を振ってまかり通っているところがあります。

鷲田 しかもその後ろに社会学の先生の名前が載ってるものもありますよね（笑い）。

大村 たしかに、いい加減な名前貸しをする人もいますけど、それについて我々大学にある社会学からの危機感というものはありますね。そういう意味では大学に期待しようよということになります。

さっきの言葉の問題に戻りますが、大澤さんはさきほど音楽という話をされましたが、私の一方の仕事である宗教教団の現場の主宰者としての気持ちとして、私が所属している教団の言説というか言葉が、なぜ一般の人たちに力を持たなくなったのかということ、つぶさに考えています。その答えとして見つけたのは、宗教というものを教団の教義学として、一つの学問にしてしまったせいだと思います。その時から、どんどん力を失ってしまったわけです。すなわち学問になると、概念というものが、その時々々の生活現場の実感を、汲み上げられなくなってしまふからです。

そういう意味では、今私たちが臨床社会学なんていうものを提案する以前に、科学言説とは別に、作家の仕事だったのかもしれない。それらは生活感覚を吸収する力がありますので、非常に説得力がある。そういった“生き死に”というような場所では、学術用語と概念用語といったようなものより、優れた作品ははるかに心を打たれることがあります。横田さんはそのことについてはどのように思われますか。

横田 ご質問の趣旨とは少し解答が違うかもしれませんが、大澤先生がおっしゃったように、言葉の力への期待というのは確かにそうなんですけど、それに過剰に期待することによって削ぎ落とされるものが、社会と大学の距離をあけているのではないかと考えられるわけです。

それと、大澤先生の話がわかった、わからないということですが、私は分からなかったし、いつ分かるのかも分からないと自分では思っています。先ほどの学生さんが先生に「先生は分かりましたか」と言ったように、社会と大学の感覚の違いで言うならば、性急に分かることが一つの価値として、たとえばこの講義が終わるまでに分からなければならない、といったことにとらわれている学生さんの、肩の力を抜いてあげたいな、と思います。

これは大澤先生の話だけでなく、なんとなく人の話はよくわからないんです。それは多分、出会ってすぐに語られる、その語り方に馴染んでいなかったり、その人をよく知らないとその人のことが分からない、ということもあると思います。私は、他人の考えが分かったことなんてありませ

んが、分からないことを受け入れながらいることで、自分の中で逆行して行って、ある時いろんなことがつながっていくという分かり方もあると思うんです。大学がそういう分かり方を許すような尺度を持つと、日常とつながっていくような気がします。

大村 それは余裕ですか？

横田 余裕というか、時間的なものだけではないと思いますが……。

鷺田 いわゆる学問的センスだよな。それって、学問に絶対必要なものなんじゃないの。

大澤 ポイントは、何がわかんないかという、その人の何を問うているかがわかんないということなんですよ。つまり、僕らは高校時代まで、問題を出されて、それに対して答えを出す訓練をしています。でも、本当は問題が何か、ということが一番問題なんです。相手が言ってることがわからないときに一番ポイントになっているのはそこなんです。相手の問いが何であるかがわからないということが一番重要なんです。

横田 もう一つ言いたかったことは、また元に戻るのですが、大澤さんの言葉を必死で聞いていくと、お互い分からないということになってしまうような気がしました。その言葉と、彼がわきまえながら言っていることとか、書いたものとか、トークなど、いろんことを含めて発せられる言葉というものからは、その人が使った意味が分かると思うんです。そういった意味では“わかる”ということは短期間のスパンのものではないと思います。言葉の力として“書かれた言葉”を分かるという要求であればわりと達成しやすいのかもしれませんが、“わかる”という意味を少しふくらませることが、“日常の知”と“学問の知”をつなげていくのかな、と思いました。

大村 ある種、まとめをつけていただいたようですが……。

鷺田 関学のドクターのレベルは高いですね（笑い）。

大村 司会が悪くて話が理路整然というわけにはいきませんでした。これで終わりたいと思います。大変長時間、ありがとうございました。